

学生の教職イメージに関する研究

—国立大学教員養成課程の学生に焦点を当てて—

Vocational image as a teacher and the effect factor

小畑文也 杉原藍衣美

Fumiya OBATA Aimi SUGIHARA

高橋弘子 名取夏海 古屋光

Hiroko TAKAHASHI Natsumi NATORI Hikari FURUYA

学生の教職イメージに関する研究

—国立大学教員養成課程の学生に焦点を当てて—

Vocational image as a teacher and the effect factor

小畑 文也* 杉原 藍衣美**

Fumiya OBATA Aimi SUGIHARA

高橋 弘子** 名取 夏海** 古屋 光**

Hiroko TAKAHASHI Natsumi NATORI Hikari FURUYA

I. はじめに

昨今、「教員という職業（以下 教職とする）」の職業イメージが低下してきている。近年は、その多忙化が問題となり、休みが少ない、残業手当が一般の企業のように出ないなど、いわゆるブラック企業をもじってブラック公職とも揶揄される。教員の仕事量の多さは、第二次世界大戦後から話題とはされてきたが、それが問題となるのは1970年代からである。これは石堂（1973）の研究に端を発する。度重なる教育改革や学校問題（70年代は、非行、校内暴力や教師の体罰に対する批判）によって、教師の多忙が「多忙感」つまりストレスに変化していった時期である。その後、学校問題は、子供の自殺、不登校、学級崩壊、モンスター・ペアレント、いじめ、貧困等と時代により、焦点を変えつつ増え続け、対応する教師の多忙感を増していった。

これらの現状を反映するかのようには、文部科学省（2018）における、国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）の平成29年3月卒業者の平均教員就職率は59.3%（すべての卒業生数を母数とした場合）であり、在学生のほとんどが教員になるという状況にはない。

また、文部科学省（2019）では、2018年度の全国の公立小学校の教員採用試験の倍率が3.2倍（前年度比0.3ポイント減）であり、過去最低となったことが明らかになった。団塊世代教員の退職に伴い、採用数が増加している反面、志望者数は増加せず、相対的に減少していると考えられる。

その一方で、城戸・高橋（2016）は、「教員養成大学・学部において、とりわけ教員志望だった学生が非希望に変化することは、学生本人にとって意欲の低下を招き、それが退学志望や、成績低下にもつながってしまう危険性をもっている」ことを明らかにした。教員養成課程においては、学生の持つ教職イメージを把握し、課程全体を通して学生が教員就職という選択に目を向けられるような指導または支援をしていくことが喫緊の課題である。

そこで、本研究では、筆者らが所属する大学の教員養成課程1～4年生を対象とした質問紙調査及び先行研究との比較を通して、学生のもつ教職イメージを明らかにし、学生への効果的な指導の手がかりとすることを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象と時期

山梨大学教育学部に在籍する、幼小発達教育（以下、幼小）、障害児教育（以下、障教）、言語教育（以下、言教）、生活社会教育（以下、社教）、科学教育（以下、科教）、芸術身体教育（以下、芸身）の6つのコースの1～4年生各10人（計240人）を無作為に選び、2019年5月～6月に実施した。

*総合研究部障害児教育講座 **特別専攻科特別支援教育専攻

2. 調査用紙について

質問紙調査にあたって、調査結果を比較するために、質問紙の中に学部、所属コース、学年、年齢、性別、親・きょうだいで教員をしている者の有無、現在考えている進路（教員、保育士、公務員、その他）について項目を作成し、回答を得た。

調査用紙は、表1に示したように、白佐（1978）が行ったSD法で7段階評定法のイメージ調査項目を用いた。その際、現在では意味が不鮮明な形容詞については、「ヤボな(ださい)」「労の多い(大変な)」のように同じ意味で使用されている形容詞を置き換えた。

教師に対するイメージを15の形容詞対について、7段階の中でイメージに最も合致する評定段階に○を記入させる方法で実施した。

表1 教職イメージ調査用紙(尺度のみ)

	非常に思う	かなり思う	やや思う	どちらでもない	やや思う	かなり思う	非常に思う	
(例)重い	1	2	③	4	5	6	7	軽い
(例)小さい	1	2	3	4	⑤	6	7	大きい
以下の表の該当する数字に○をつけてください。								
	非常に思う	かなり思う	やや思う	どちらでもない	やや思う	かなり思う	非常に思う	
望みのある	1	2	3	4	5	6	7	望みのない
平凡な	1	2	3	4	5	6	7	特色のある
きゅうくつな	1	2	3	4	5	6	7	自由な
安定した	1	2	3	4	5	6	7	不安定な
明るい	1	2	3	4	5	6	7	暗い
スマートな	1	2	3	4	5	6	7	ヤボな(ださい)
つまらない	1	2	3	4	5	6	7	面白い
好きな	1	2	3	4	5	6	7	嫌いな
年寄りじみた	1	2	3	4	5	6	7	若々しい
重要な	1	2	3	4	5	6	7	重要でない
なりたい	1	2	3	4	5	6	7	なりたくない
らかな	1	2	3	4	5	6	7	労の多い(大変な)
責任感の強い	1	2	3	4	5	6	7	無責任な
活気のある	1	2	3	4	5	6	7	活気のない
価値のない	1	2	3	4	5	6	7	価値のある

3. 手続き

各尺度の各段階に、1～7点を与えた。なお、形容詞対について、プラスのイメージになるものの点数が高くなるようにした。そのため、調査用紙と方向は異なっているものもある。例えば「望みのある⇔望みのない」は「望みのある」につれて点数が高くなるようにした。これらについて α 係数を算出した結果、0.80であり、加算の妥当性を得た。そのため、各形容詞対の付点合計を個人のイメージ得点とした。これを従属変数とし、学年、性別、所属、親族の教員の有無、進路（教職に就くかつかないか）を独立変数とし、数量化I類を行った。その後、表1で示した項目にそって、教職イメージの比較を行った。先行研究である白佐（1978）の「学生の教職イメージに関する研究 その1：小学校教師に対するイメージ」と山梨大学の学生の抱くイメージを比較した。なお上記の計算には BellCurve for EXCEL 統計（社会情報サービス）を用いた。

Ⅲ. 質問紙調査による結果と考察

1. 回収率

教職課程に所属する1年生～4年生までの240名（男性102名、女性138名）から回答を得た。（回収率100%）

2. 数量化I類の結果

独立変数すべての重相関係数は0.30、説明率は9%に過ぎなかったため、今回の調査から、決定的な要因を見出すことはできなかった。従って、以下の結果と考察はあくまで、相対的な傾向からみたものである。

図1は各独立変数の従属変数に与える影響をレンジで示したものである。

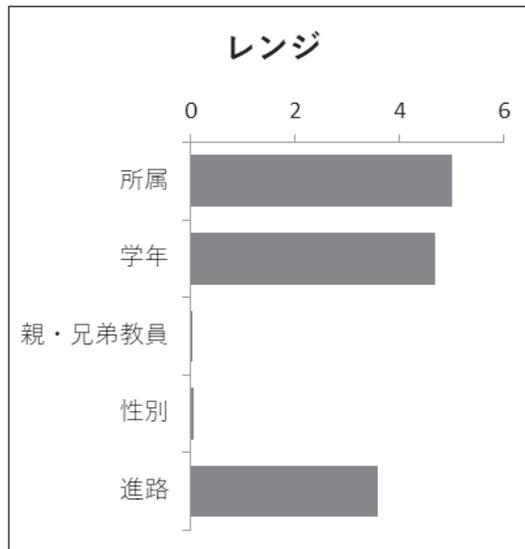


図1 独立変数の各説明率(数量化I類の結果)

これから分かるように、結果は大きく二分され、親族に教員がいるか、性別は、教職イメージにほとんど影響を与えていない。半面、所属、学年は、一定の影響を与えている。

3. 山梨大学教員養成課程の学生の教職イメージ

以上より、教職イメージに影響している要因として以下の通り、3つの項目に着目し、考察を行った。

- (1) コースごとの教職イメージの比較
- (2) 学年ごとの教職イメージの変化
- (3) 学生が現在考えている進路

(1) コースごとの教職イメージの比較

図2に、コースごとに比較した教職に対するイメージを示した。ほとんどのコースにおいて教職イメージの差に大きな変化は見られなかった。一方で、芸身では教職イメージが低かったことがわかる。芸身は、小学校教諭だけでなく、中学校教諭や高校教諭の音楽科、美術科、保健体育科の各教科の専門的な教員免許を取得することができる。音楽や美術、保健体育といった分野は、教育現場のみならず芸術やスポーツ分野においても活躍することが期待されるため、高い教職に対するイメージの結果に結びつかなかったと考える。

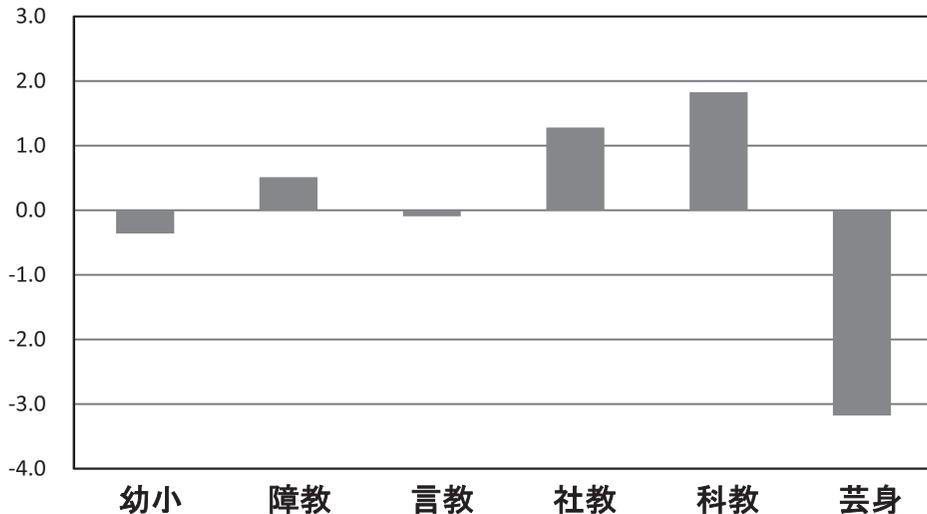


図2 コースごとの教職イメージ(総点比)

(2) 学年ごとの教職イメージの変化

入学時(1年生)の教職に対してのイメージを図3に、卒業時(4年生)の教職イメージを図3に、1年生～4年生の教職イメージの変化を図4に示した。

図2, 3より、顕著な特徴は見られなかった。一方で、「重要な」「責任感の強い」「価値のある」の3点は教職イメージ得点が高く、「自由な」「スマートな」「若々しい」の3点は教職イメージ得点の低い結果として見られた。

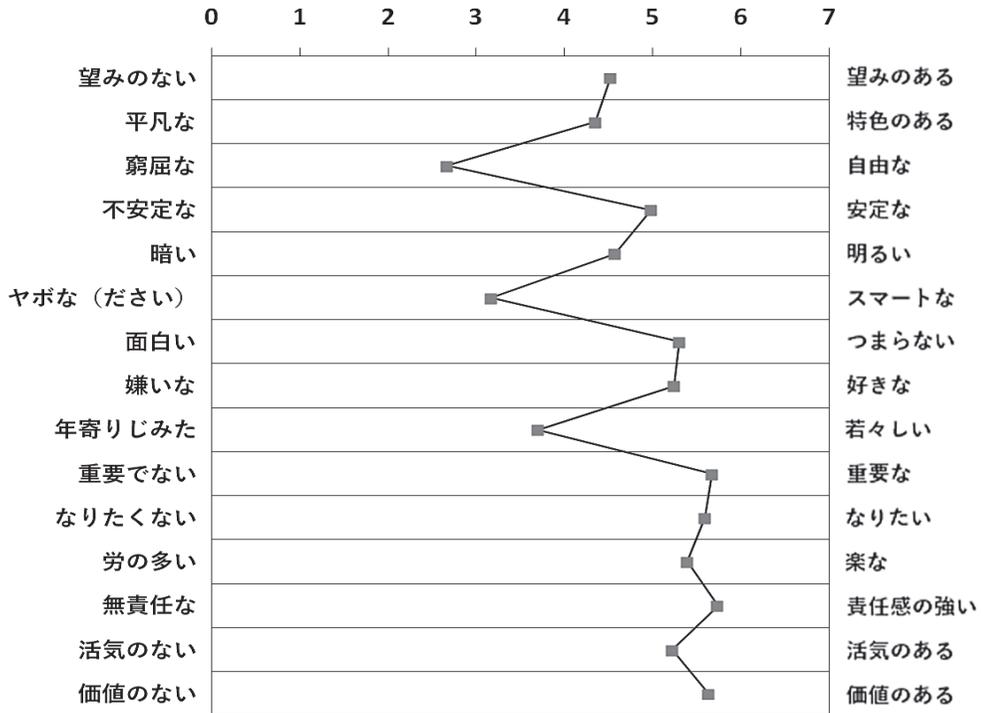


図3 入学時(1年生)の教職イメージ

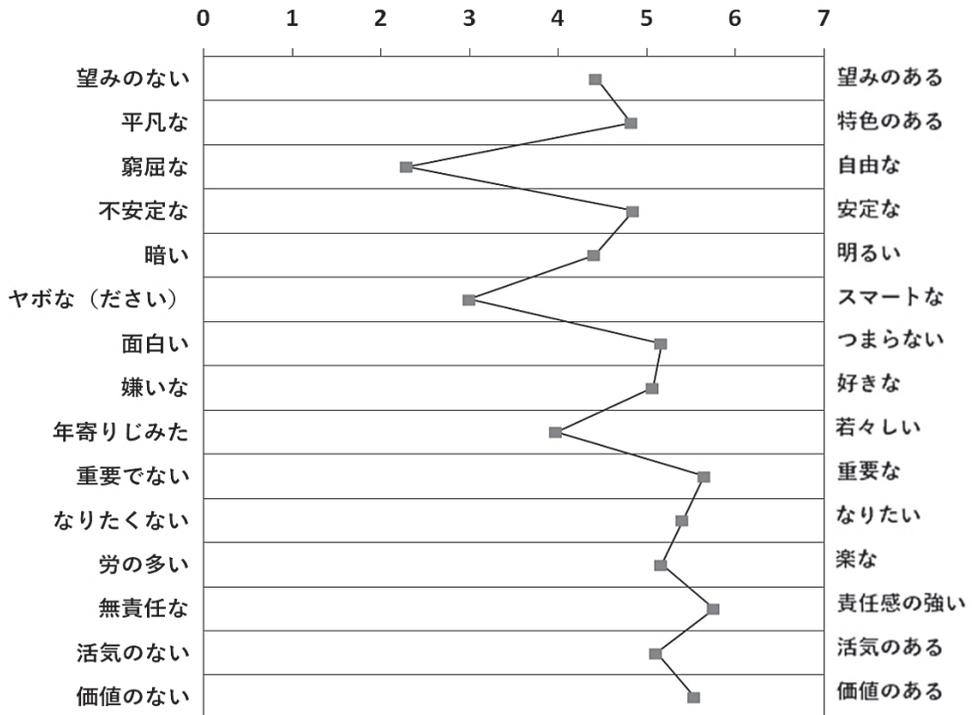


図4 卒業時(4年生)の教職イメージ

また、図5より、2年生が特に教職に対するイメージが低かったことが伺える。1年生は高校を卒業して間もないため、自身がこれまで関わってきた教員のイメージが反映されたと考えられる。2年生は大学生活にも慣れる時期である一方で、調査時期が5月～6月であったため実習に行っている3年生から教育実習の経験を聞き、漠然とした教育実習のイメージに不安も高まっているため、教職イメージが低く表れたと考えられる。

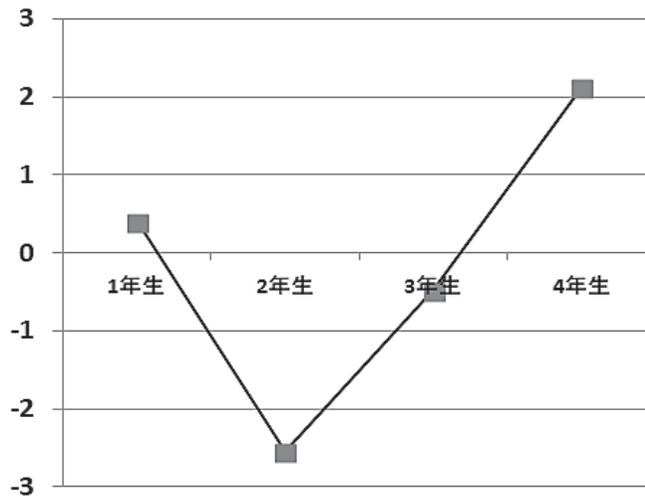


図5 入学時(1年生)～卒業時(4年生)の教職イメージの変化(総点比)

(3) 学生が現在考えている進路

教職系に就くことを考えている学生が240名中196名であったのに対し、企業等その他の進路を検討している学生は44名であった。教職の進路を検討している学生の教職イメージは0.6553ポイントで、教職以外の進路を検討している学生の教職イメージは-2.9193ポイントであり、教職以外の進路を検討している学生の教職イメージが低いことが伺える。当然のことではあるが、教職に対するイメージが高いほど、進路の一つに教職が含まれることになると思われる。

IV. 先行研究との比較

白佐(1978)は、約40年前に北海道の短期大学において学生の教職イメージに関する研究を行った。なお、白佐が質問紙調査に用いた教職イメージ尺度は、今回筆者らが用いたものと同じである。

当初、片方が女子大学であることから比較の意図はなかったが、先の分析において、男女におけるイメージの差がなかったことから、参考として比較した。

図6に示したものは、約40年前の、私学女子短大教員養成課程と、2019年の山梨大学の教員養成課程の教職イメージの比較である。

全体的には同じプロフィールを描いているが、特に先行研究の教職イメージにおいて「責任感の強い」「重要な」「価値のある」「なりたい」が高い得点を示し、また「自由な」「スマートな」が低い得点を示した。一方、山梨大学における教職イメージにおいても、同様な結果が得られた。このことから、これらが、約40年前と現在の学生の教職イメージとして、普遍的であるものを伺うことができた。

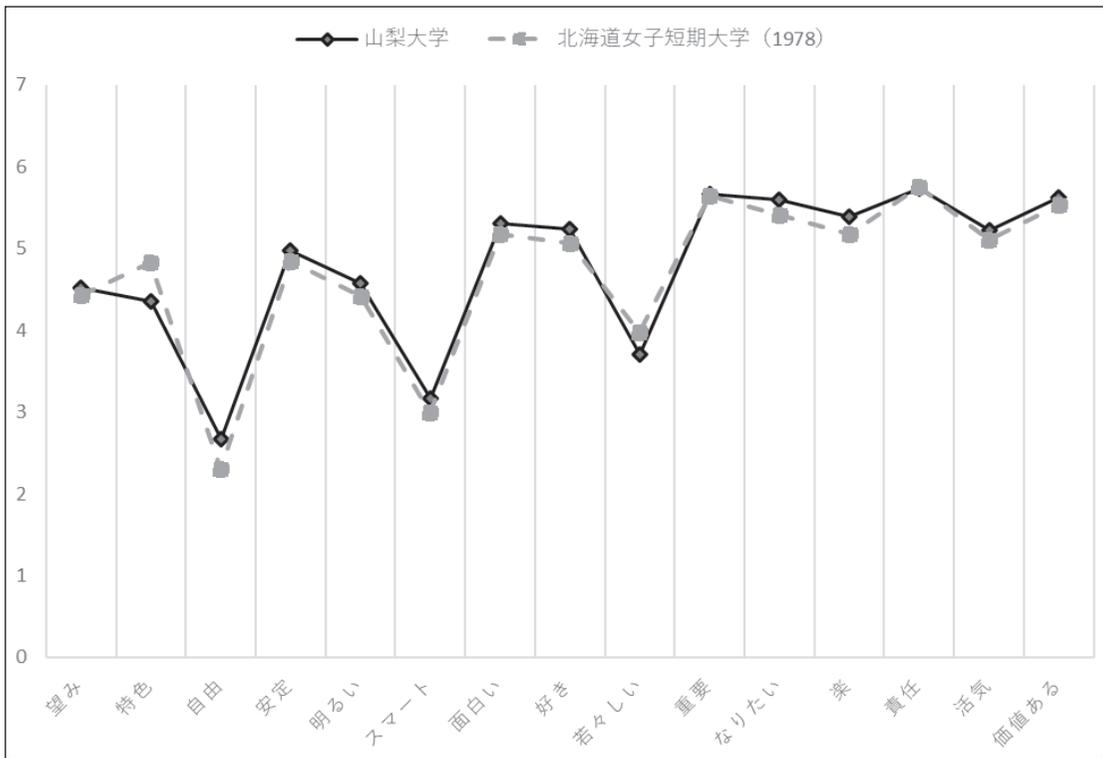


図6 同一尺度で測定した1978年と2019年の教職イメージの比較

「若々しい」「年寄りじみた」という尺度においては、白佐（1978）では、「若々しい」のイメージが高かったが、今回の調査では「年寄りじみた」が高かった。現在の教員の年齢層を考えると、退職前の団塊世代の教員の割合が非常に多い。白佐（1978）の調査では、団塊の世代の教員が若手であったことから、学生がこれまでに会った教師の年齢層が教職イメージに反映されていると考える。

白佐（1978）において、小学校教員を志望する学生の入学時から卒業時（3年生）までの教職イメージは、どの時点でもほとんど差がなく、卒業時における教職イメージの平均値の合計は34.32ポイントであることがわかった。一方、山梨大学の学生における教職イメージは各学年において差が見られた。とりわけ、卒業時（4年生）の教職イメージの平均値の合計は70.68ポイントであり、非常に高い得点を示した。卒業時（4年生）の教職イメージが高い要因として、教育実習を通じた教師・子どもとの出会いや教職への期待と不安を同じように抱えている仲間との4年間の学生生活全体が大いに影響していると考えられる。さらに、質問紙調査を行った時期が教員採用試験の直前であり、教員就職という進路を選択した学生にとっては教職へのより具体的な期待感が高まっており、下学年より高い結果が得られたと考えられる。

V. おわりに

今回の調査では、以下の5点が明らかになった。

- ①課程ごとの教職イメージ差はほとんどない。
- ②学年の比較では、2年生が最も低く、教育実習経験者である4年生が最も高い。
- ③男女の比較ではほとんど差は見られなかった。また親あるいはきょうだいが教員であるか否かも差はなかった。

④教員を志望している学生の方が、そうでない学生に比べて教職に好意的なイメージをもっている。

⑤ここ40年で教職イメージに大きな変化はない。

白佐(1978)と比較し約40年前との教職イメージの変容を伺うことはできたが、結果として、様々な学校事件や風評にも関わらず、教職イメージに大きな差はないことが明らかとなったが、今回の調査では、各大学の特色や学生の特徴等を考慮していない。今後も引き続き他大学との比較調査を行うことで、本学の学生により特化した指導・支援の手掛かりを掴むことができると考える。

現代では、教員採用試験を受験する人数が減少している。学生が抱く教職イメージについて調査を継続的に行うことは教員養成系大学、教育現場にとって指導や職場環境の改善につながるだろう。

また、これは先行研究も同様であるが、他職種のイメージとの比較を行っていない。大学の場合、それぞれの学部が、自分の進路に良いイメージを持っていることは十分にありえることであるので、相互のイメージを比較した検討も必要になってくると思われる。

文献

- 1) 岩堂豊(1973)『教師の疲労とモラル』黎明書房
- 2) 白佐俊憲(1978)「学生の教職イメージに関する研究 その1：小学校教師に対するイメージ」. 北海道女子短期大学紀要, 11, 73-88.
- 3) 城戸楓・高橋登(2016)「教員養成大学において教員非志望であること—大学教育における志望職種が就学に与える影響—」. 日本教育心理学会第58回総会発表論文集, 649.

参考URL

- 1) 文部科学省(2018)国立の教員養成大学・学部(教員養成課程)の平成29年3月卒業者の就職状況等について. 文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室, 2018年2月7日, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/02/1401088.htm, (2019年8月25日閲覧).
- 2) 文部科学省(2019)平成29年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について. 文部科学省総合教育政策局教育人材政策課, 2019年4月19日, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1416039.htm, (2019年8月25日閲覧).